

里耶秦簡にみえる行書空間

畑 野 吉 則

The transfer of documents in the wooden tablets of Liye

HATANO Yoshinori

In this article, I gather materials concerning the transfer of documents in the wooden tablets of Liye; being impossible to ask questions from historical records, I investigated the actual reality of the transfer of documents at the prefectural level during the Qin dynasty. According to the analysis, it is possible to confirm the clear division of the fixed format of the records of the forwarding and of the responsible for the transfer. Furthermore, the analysis points out the existence of A sophisticated system for the transfer of documents that was not clearly stated in the legal system of the Qin dynasty, such as the structure consisting of multiple organizations for the management in several departments.

On the base of these results, the question of when and how was born the system for the transfer of documents, until now based on studies about the wooden strips of Juyan, should not be dealt with only by comparing the legal system of Qin and Han dynasties; it becomes possible, instead, a research approach that compares different points in different periods and areas, such as with the wooden tablets of Liye, the wooden strips of Xuanquan and those of Juyuan. While reflecting on these themes, we should from now discuss about the system for the transfer of documents in the Qin and Han dynasties.

キーワード：里耶秦簡 文書通伝 通送記録 行書律

はじめに

秦代の文書通伝については典籍史料に記載が少なく、睡虎地秦簡・秦律十八種の行書律に記された制度面を中心に研究が進められた¹⁾。このような状況を一変させたのは、二〇〇二年に湖南省龍山県里耶鎮

1) 先秦には「遽」という通信方式があり、『左伝』や『国語』、『周礼』、『管子』に記載がある。青山定男「支那上代の駅伝」(国際交通文化協会『交通文化』第三号、一九三八年)では、「遽」は後世の駅伝に相当し、特に軍事上の急事に用いられたとする。このほか、典籍史料にみえる文書通伝に関する記載は、『漢旧儀』や『漢官儀』、『説文解字』、正史など、いずれも漢代以降のものである。典籍史料にみえる郵駅制度については、伊藤徳男「漢代の郵について」(『東洋学報』第二八卷第三号、一九四一年)がある。睡虎地秦簡の行書律については、熊鉄基「秦代的郵伝制度——讀雲夢秦簡割記」(『学術研究』一九七九年第三期)等に詳しい。

から発見された里耶秦簡である。

里耶秦簡には、遷陵県廷における文書通伝の詳細を記した通送記録がいくつか確認でき、居延漢簡の郵書と類似する特徴を持つ²⁾。このほかに里耶秦簡の文書簡の多くには、文書を受信・発信した際の日時と担当者が記されている。以上、二種類の資料により、遷陵県における文書通伝は（１）遷陵県廷〔通送記録〕、（２）遷陵県廷と官〔県内文書〕、（３）遷陵県廷と洞庭郡および他県〔県外文書〕、の三つの空間に区分できる。このうち筆者はかつて（１）遷陵県廷について、里耶秦簡の通送記録をもとに、通伝業務の仕組みとその文書の動線を明らかにし、遷陵県廷における文書の発信過程を復元した（以下、旧稿³⁾）。

そこで本稿では、上記のうち（２）県内文書と（３）県外文書の動線を復元し、秦代県レベルにおける文書通伝システムの全体像を明らかにしたい。

本論に入る前に、里耶秦簡の公開状況について簡単に述べておこう。里耶秦簡は統一秦代の遷陵県城跡の古井戸から発見された行政簡牘資料群で、その総数は三八〇〇〇点といわれる。まず、二〇〇三年「湖南龍山里耶戦国——秦代古城一号井発掘報告」に三五点のサンプル資料が紹介され、二〇〇七年『里耶発掘報告』（以下『発掘報告』）に一〇〇余点が公開された⁴⁾。そして、二〇一二年『里耶秦簡〔壹〕』（以下『里耶〔壹〕』）および『里耶秦簡牘校釈（第一巻）』（以下『里耶校釈（一）』）により、第五層、第六層、第八層から出土した二六〇〇点以上が公開され⁵⁾、その後『湖南出土簡牘選編』（以下『簡牘選編』）や『里耶秦簡博物館藏秦簡』（以下『里耶博秦簡』）などの図版や論文等により、新たな資料が追加された⁶⁾。

上記資料のうち、第八層から出土した文書簡の受信・発信記録については、すでに高村武幸氏の論考がある⁷⁾。そこで本稿では、高村論考以降に発表された資料を追加して、遷陵県における文書通伝の全体像を概観したい。

なお、本稿で引用する里耶秦簡の簡番号は『里耶〔壹〕』の整理番号を使用し、行論上、必要ない場合は簡番号のみを示す（例：16-5）。また、釈文校訂と断簡の復原については、『里耶校釈（一）』および『里耶博秦簡』に拠る。

2) 居延漢簡の郵書は、永田英正「居延漢簡の集成一」「居延漢簡の集成二」（『居延漢簡の研究』、同朋舎出版、一九八九年）、および李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』「録課」類（文物出版社、二〇〇九年）に集成されている。

3) 拙稿「里耶秦簡の郵書記録と文書伝達」（愛媛大学「資料学」研究会編『資料学の方法を探る』第一二号、二〇一三年）。

4) 湖南省文物考古研究所・湘西土家族苗族自治州文物処・龍山県文物管理所「湖南龍山里耶戦国——秦代古城一号井発掘簡報」（『文物』二〇〇三年第一期）。

湖南省文物考古研究所編『里耶発掘報告』（岳麓書社、二〇〇七年）。

5) 湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡〔壹〕』（文物出版社、二〇一二年）。

陳偉主編『里耶秦簡牘校釈（第一巻）』（武漢大学出版社、二〇一二年）。

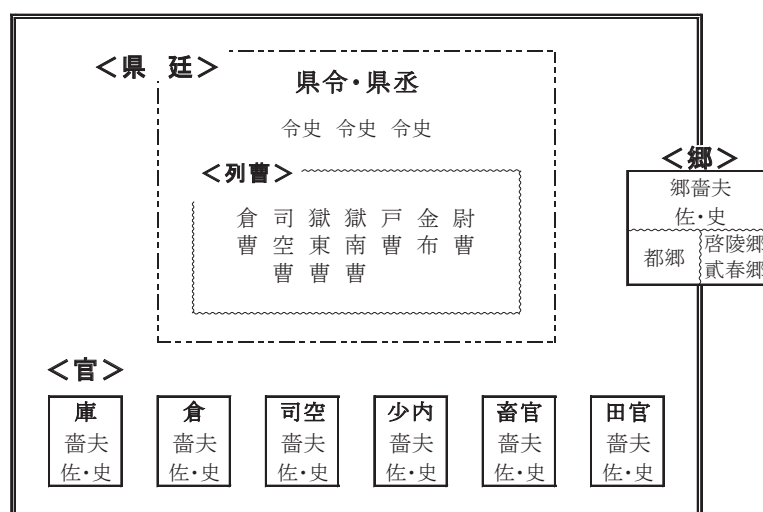
6) 鄭曙斌・張俊龍・宋少華・黃樸華編『湖南出土簡牘選編』（岳麓書社、二〇一三年）。

里耶秦簡博物館・出土文献与中国古代文明研究協同創新中心中国人民大学中心編『里耶秦簡博物館藏秦簡』（中西書局、二〇一六年六月）。

7) 高村武幸「里耶秦簡第八層出土簡牘の基礎的研究」（『三重大史学』第十四号、二〇一四年）。

一 県内文書にみえる文書通伝

ここでは里耶秦簡の県内文書に記された受信・発信記録をもとに、通伝担当者と作業動線について考察する。なお、遷陵県下の都郷・貳春郷・啓陵郷については、県内に含めることとする。考察に入る前に、いま一度、遷陵県下の官制構造について確認したい。土口史記氏によると、遷陵県下の官制構造は、県廷・官・郷の三つに区分できる。まず県廷は、県の長官である令と次官である丞が統べる県行政の中核であり、そこには令史が属していた。次に官は、県行政の実務を担当する諸部局であり、長である官嗇夫と佐・史によって構成された。そして郷は、郷嗇夫と佐・史によって構成された。このような遷陵県下の官制構造は図一のように示すことができる⁸⁾。



図一 遷陵県下の官制構造

上図の官制構造下での文書伝達について、陳偉氏は『発掘報告』で発表された一〇〇余点の資料をもとに概観している⁹⁾。また『里耶（壹）』刊行後、高村武幸氏は第八層の資料を集成し、この問題について詳細に論じている¹⁰⁾。そこで本節では、第八層以外の資料と新たな綴合案の事例を追加し、通伝担当者の特徴とその作業動線を明らかにしたい¹¹⁾。

8) 土口史記「戦国・秦代の県——県廷と「官」の関係をめぐる一考察——」（『史林』第九五巻第一号、二〇一二年）、および前掲土口「里耶秦簡にみる秦代県下の官制構造」参照。図二は、前者の「図四 県廷と『官』」（一六頁）をもとに筆者が作成した。

9) 陳偉（柿沼陽平訳）「秦と漢初の文書伝達システム」（藤田勝久・松原弘宣編『古代東アジアの情報伝達』、汲古書院、二〇〇八年）。

10) 前掲高村「里耶秦簡第八層出土簡牘の基礎的研究」では、第八層から出土した文書簡の発受信情報を集成・一覧している（五〇頁）。

11) 現在公開されている里耶秦簡第八層以外の資料は、前掲『里耶博秦簡』、前掲『簡牘選編』、ならびに武汉大学簡帛網で公開されている以下の論文に釈文が公開されている。

游逸飛・陳弘音「里耶秦簡博物館蔵第九層簡牘積文校釈」（武汉大学簡帛研究中心『簡帛網』二〇一三年十二月二十二日発布）。

また里耶秦簡の公文書には、複数の行政機関を経由した複合文書が存在することにも注意が必要である¹²⁾。この複合文書は、一枚の木牘に、複数の要件とそれに伴う発信と受信の情報が列記されるため、発信・受信関係の判別が困難ではあるが、発信・受信関係と通伝担当者が明確なものについては、文書内容ごとに分割し、それぞれ一例と数えることとした¹³⁾。

上述の複合文書に記された発信と受信の記録からは、遷陵県内における文書とそれを通伝した人員（刑名あるいは役務名+人名）の詳細な動きを読み取ることができる。例を挙げて説明しよう。

- 1 ①卅四年九月癸亥朔乙酉，畜【官】獲敢言之。廼四月乙未，言曰□□
蓋侍食羸病馬無小，謁令官遣□更繕治，致（至）今弗遣步。冬多雨，韓□□
病者無小，今止行書徒更戌城父柘【里】士五（伍）辟繕治，謁令尉定□
之。／②卅五年十一月辛卯朔＝日，遷陵【守】丞繹告尉主。聽書從事，它（正）
如律令。／履手。／③十一月【壬申】日入，隸妾規行。
④十一月辛卯旦，史獲以來。／~~因~~發。【獲手】□（8-143+8-2161+8-69背）¹⁴⁾

簡1の文書は以下のように分割でき、一点の文書から、（1）畜官から県廷へ、（2）県廷から県尉へという二例の文書通伝が確認できる。（下線部は人名を示す）。

（1）遷陵県廷の受信記録（畜官→県廷）

- ①始皇34年9月23日，畜官の獲が遷陵県廷に文書を送った。（文責：史の獲）
④始皇35年11月1日，遷陵県廷に史の獲が持って来て，因が受領した。【受信記録】

（2）遷陵県廷の発信記録（県廷→県尉）

- ②始皇35年11月1日，遷陵県丞の繹が県尉に文書を送った。（文責：履）
③始皇35年11月2日，隸妾の規が県尉に文書を通送した。【発信記録】

1 県内文書の通伝1——官

里耶秦簡にみえる県内文書は、A 県廷と官との通伝、そしてB 県廷と郷との通伝に大別できる。A に

里耶秦簡牘校釈小組（武漢大學簡帛研究中心）「新見里耶秦簡牘資料選校（一）」（同『簡帛網』二〇一四年九月一日発布）。同「新見里耶秦簡牘資料選校（二）」（同『簡帛網』二〇一四年九月一日発布）。同「新見里耶秦簡牘資料選校（三）」（同『簡帛網』二〇一五年八月七日発布）。

- 12) 里耶秦簡の文書構造については、呂静「秦代における行政文書の管理に関する考察——里耶秦牘の性格をめぐって」（『東洋文化研究所紀要』第一五八冊，二〇一〇年）に詳しい。
- 13) 前掲高村「里耶秦簡第八層出土簡牘の基礎的研究」では、里耶秦簡の複合文書に対して、「上行文書に対する返答の部分こそが本体と考えられる。従って、本質的には『一点の下行文書』と判断すべき」（四六頁）と考える。筆者もこの考えに賛同する。ただし本稿では、このような複合文書について、文書通伝の事例を活用するため、便宜的に分割してそれぞれ一例とみなした。
- 14) この簡の綴合は、何有祖「里耶秦簡牘綴合（九）」（武漢大学簡帛研究中心『簡帛網』二〇一五年十一月二十三日発布）に拠る。

については行論上、A①県廷から官への通伝、A②官から県廷への通伝に別けて考察する。A①とA②を整理すると、表一のようなになる（ は、文書書写者と通伝担当者が同一であることを示す）。

表一 県内文書の通伝1

A①遷陵県廷 → 官（一五例）

N _o	簡 号	発信	受信	時刻	通伝	行/以來	書写
1	8-63②	遷陵守丞敬	司空主	即	走申	行司空	慮手
2	8-69+8-143+8-2161②	遷陵【守】丞繹	尉主	日時計	隸妾規	行	—
3	8-71	遷陵丞昌	(尉曹)	漏刻	守府快	行尉曹	不明
4	8-135②	遷陵守丞敦孤	(司空)	即	走□	行司空	慮手
5	8-140	遷陵丞昌	尉主	日時計	守府快	行	悟手
6	8-155	遷陵守丞色	少内	漏刻	守府快	行少内	—
7	8-657③	遷陵守丞臚之	尉官主	日時計	走印	行	—
8	8-1510②	遷陵守丞敦孤	司空主	不明	……昭	行	不明
9	8-1525②	遷陵守丞配	倉主	日時計	守府印	行	—
10	8-1538	遷陵守丞配	告……	日時計	隸妾孫	行	不明
11	8-1560	遷陵丞昌	倉嗇夫	日時計	守府快	行	言手
12	8-1563②	遷陵守丞臚之	倉主	即	(公卒)徐	不明	—
13	12-849②	遷陵丞欧	司空守	日時計	佐頹	行	鉤手
14	16-5③	遷陵丞欧	尉	漏刻	隸臣尚	行	鉤手
15	16-6②	遷陵守丞敦孤	尉	漏刻	走招	行尉	鉤手

A②官 → 遷陵県廷（三三例）

N _o	簡 号	発信	受信	時刻	通伝	行/以來	書写
1	8-67+8-652	尉守蜀	(県廷)	不明	走利	以來	憲【手】
2	8-1477+8-1141	尉廣	(県廷)	日時計	守府交	以來	不明
3	8-1563①	尉守竊	(県廷)	記載なし	胸忍宜利錡	以來	齧手
4	8-136+8-144	倉守敬	(県廷)	漏刻	小史夷吾	以來	尚手
5	8-736	【倉是】	(県廷)	日時計	隸【妾】□	以來	不明
6	8-1490+8-1518	倉武	(県廷)	漏刻	佐尚	以來	尚手
7	8-1559	段倉茲	(県廷)	日時計	佐居	以來	居手
8	12-1780	倉趙	(県廷)	日時計	隸臣庫	以來	不明
9	8-1452	倉守敬	(県廷)	漏刻	走屈	行	操手
10	8-173	庫武	(県廷)	日時計	佐處	以來	處手
11	8-1069+8-1434+8-1520	庫武	(県廷)	日時計	佐横	以來	不明
12	8-1510①	庫後	(県廷)	漏刻	佐赳	以來	不明
13	8-1514	庫守悍	(県廷)	漏刻	佐園	以來	不明
14	8-686+8-973	庫守悍	(県廷)	日時計	隸臣負解	行廷	逐手
15	8-135①	司空守樛	(県廷)	日時計	走己巳	以來	□手
16	8-145+9-2294	司空守園	(県廷)	漏刻	佐瘞	以來	瘞手
17	8-666+8-2006	司空守敞	(県廷)	日時計	隸臣殷	以來	武【手】
18	8-1524	司空色	(県廷)	漏刻	隸臣畜	以來	郤手
19	11-249	司空色	(県廷)	漏刻	佐瘞	以來	不明
20	8-75+8-166+8-485②	少内守公	(県廷)	漏刻	佐氣	以來	氣手
21	8-152	少内守是	(県廷)	日時計	佐處	以來	處手
22	8-2034	少内守敞	(県廷)	日時計	佐□	以來	不明

23	8-164+8-1475	少内武	(県廷)	漏刻	佐欣	行廷	欣手
24	8-890+8-1583	少内守増	(県廷)	日時計	佐欣	行	欣手
25	8-143+8-2161+8-69①	畜官獲	(県廷)	日時計	史獲	以來	【獲手】
26	8-199+8-688	畜官守丙	(県廷)	漏刻	佐貳	以來	不明
27	8-672	田官守敬	(県廷)	日時計	史逐	以來	不明
28	8-1566	田官守敬	(県廷)	漏刻	佐壬	以來	逐手
29	9-981	田官守敬	(県廷)	日時計	佐壬	以來	壬手
30	9-1867	田官守獮	(県廷)	日時計	(田官守)獮	以來	獮手
31	9-2350	【田】守武	(県廷)	漏刻	佐銜	以來	銜手
32	10-412	田	(県廷)	日時計	史□	以來	不明
33	8-141+8-668	發弩(尉)守涓	(県廷)	日時計	守府定	以來	萃手

A ①遷陵県廷から官へ送られた文書：

県廷から官へ送られた文書の通伝について、通伝担当者を中心に検討してみよう。表一 A ①にあるように、県廷から官へ送られた文書の通伝担当者は、断簡のため刑名（役務名）が不明な（8）8-1510②「……昭」と、（12）8-1563②「（公卒）徐」を除くと、いずれも隸臣妾および「走」と「守府」に限定されている。以下、二つの例外について考えてみよう。

まず、（8）8-1510②の「昭」という人名については、県廷内列曹で作成された文書についての通送記録8-2028の通伝担当として同名「昭」がみえるが、8-2028も下部断簡のため特定できない。ただし、旧稿で指摘したように、里耶秦簡の通送記録に記された文書の通伝担当者「走」「守府」「牢人」などはいずれも隸臣妾であった¹⁵⁾。そのため8-2028の「昭」も同様に隸臣妾と考えられる。そうすると8-2028と8-1510②の「昭」は同一人物である可能性が高いため、8-1510②の「昭」も隸臣妾と推測できる。

次に、（12）8-1563についてはやや難解であるため、全文を引用して考察しよう。

2 ①廿八年七月戊戌朔癸卯，尉守竊敢言之。洞庭尉遣巫居貸公卒安成徐署遷陵。今徐以壬寅事，謁令倉貢食，移尉以展約日。敢言之。②七月癸卯，遷陵守丞臚之告倉主。以律令從事。／逐手。④即徐□入□。（正）

③癸卯，胸忍宜利錡以來。／敞半。 齮手。（8-1563背）

（1）遷陵県廷の受信（尉→県廷）

①始皇28年7月6日，尉守の竊が遷陵県廷に文書を送った。（文責：齮）

③同日，遷陵県廷に胸忍県宜利里出身の錡が持ってきて，敞が受領した。

（2）遷陵県廷の発信（県廷→倉主）

②同日，遷陵県丞の臚之が倉主に文書を送った。（文責：逐）

④すぐに，居貸公卒で巫県安成里出身の徐が倉に文書を運んだ。

15) 前掲拙稿「里耶秦簡の郵書記録と文書伝達」三五頁。

簡2の概略は次のとおりである。まず、洞庭郡尉府が居貸公卒の徐という人物を遷陵県に派遣した。次に、遷陵県尉は、壬寅の日、つまり文書を送った前日の日付をもって、この徐を倉に関連する用務に就かせると県廷に報告した。そして、遷陵県丞の牘之は「以律令從事」と記した文書を徐に持たせ、倉まで運ばせた。

この文書には、洞庭郡尉から遷陵県尉へ向けた命令の内容は記されていないが、その内容は他県の居貸公卒である徐を、遷陵県の役務に就かせるものであったと予想される。そのためこのケースでは、居貸公卒の徐本人がこの文書を倉まで持参する必要があったと考えられる。

以上、(12) 8-1563の一例を除けば、県廷から官への文書は、いずれも隸臣妾によって通伝されたことがわかる。この県廷から官へ向けて文書を通伝する隸臣妾は、「倉徒簿」(10-1170)にみえる「廷走」や「廷守府」にあたり、県廷での文書通伝などに使役されたと考えられる¹⁶⁾。

A②官から遷陵県廷へ送られた文書：

官から県廷へ送られた文書の通伝は、表一 A②にあるように、「走」や「守府」などの隸臣妾による通伝は一〇例、佐や史など官吏による通伝は二二例確認できる。

まず、官吏による通伝について、二二例のうち一二例は、文書の書写者（作成者）と通伝担当者が一致する。この現象については、すでに高村氏が指摘するように「文書作成者本人または文書の内容・背景を知る者に文書を持たせれば、県廷から内容に疑義を呈された場合などに即座に対応できるため」と考えられる¹⁷⁾。この指摘は以下の資料からも裏付けられる。

3 廿七年六月乙亥朔壬午，貳春鄉窰敢言之。貳春津當用船一艘（艘）。●今以旦遣佐頹受謁令官段（假）。謁報。敢言之。（正）

六月丁亥，遷陵丞歐告司空主。以律令從事。報之。／鉤手。

丁亥日中，佐頹行。

六月丁亥水下三刻，佐頹以來。／鉤半。 頹手。（12-849背）

簡3は、始皇二七年（前220）六月八日に貳春郷から遷陵県廷へ送られた文書で、その内容は「貳春郷の渡し場で船が一艘必要なので、本日の朝に郷佐の頹に取りに行かせる」というものである。この文書は佐の頹によって書写され、十三日に頹本人が遷陵県廷まで送り届けている。そして同日、頹は司空に文書を運んでいる。船の管理が司空の担当であったためである。このように、文書書写者と当該文書に記された内容・用務に関連がある場合、書写者本人に直接文書を通伝させることがあった。

次に、ここでの「走」（隸臣）は、官に属する史に割り振られた隸臣——「吏走」と考えられる。この

16) 張春龍「里耶秦簡中遷陵県之刑徒」（『古文字与古代史』第三輯，二〇一二年）では、里耶秦簡中の刑徒に関する帳簿「作徒簿」を集成している。作徒簿は、秦が南方開発に投入した労役刑徒の実態が記されている貴重な資料である。

17) 前掲高村「里耶秦簡第八層出土簡牘の基礎的研究」五一頁。

「吏走」と、先述した「廷走」の違いについて考えてみよう。まず「廷走」、つまり県廷に属する令史に「走」が割り振られた状況は、簡4・5にみえる（下線部は人名）。

4 廿八年六月己巳朔甲午，倉武敢言之。令史敵・彼死共走興。今彼死次不當得走，令史崎當得未有走。今令崎襲彼死處，與敵共走。倉已定籍。敢言之。(8-1490+8-1518正)

5 卅一年後九月庚辰朔辛巳，遷陵丞昌謂倉嗇夫。令史言以辛巳視事，以律令假養，襲令史朝走啟。定其符。它如律令。(8-1560正)

簡4の内容は次のようである。まず、令史の敵と彼死が共同で「走」を使役していたが、彼死の階級（「次」）では「走」を使役できない。しかし、令史の崎であれば「走」を使役できる。そこで、崎に彼死の仕事を引き継がせ、敵と共同で「走」を使役させた。そして、簡5では、令史の言が九月辛巳（二日）付けで「養」を与えられたため¹⁸⁾、令史の朝に「走」の啓を引き継がせたとある。

以上、図一に示すように、令史は県廷に属しているため、彼らに割り振られた「走」は「廷走」と考えられる。そうすると、「吏走」は、県廷ではなく官に派遣された「走」であろうか？

さらに、簡4には「倉已定籍」、簡5には「定其符」とある。これらは、倉が作成した作徒簿に記録された隸臣妾の役務内容を変更して、再登録する状況を示している。例えば、前掲「倉徒簿」（10-1170）の「男卅人廷走」，「小男三百卅人吏走」のように、倉から一人の隸臣が「廷走」として廷に派遣され、一人の小隸臣が「吏走」の役務に派遣されたことは簿籍に記録され、もしも彼らの役務を変更・再登録する際には、簡4や簡5のような手続きが必要であった。したがって、一度割り振られた役務に従事する隸臣妾は、ほかの部署で使役することができなかったのであろう。この点についてさらに考えてみよう。

先述のとおり、A①県廷から官への文書を通伝した「走」と「守府」は、前掲「倉徒簿」（10-1170）にみえる「廷走」と「廷守府」（いずれも隸臣）で、A②官から県廷への文書を通伝した「走」は「吏走」（小隸臣）と推察される。これらのうち、A①の通伝担当者の多くは、通送記録にみえる通伝担当者と重複する。それらを一覧したものが表二である。

表二に挙げた、表一A①および通送記録に重複する通伝担当者は同一人物である。さらに、後述する表三B①県廷から都郷へ送った文書の通伝担当者にも、「守府快」（8-157）と「走印」（9-984）がみえる。その一方、表一A②官から県廷へ送った文書の通伝担当者は、表四A①および通送記録と一致するものはない。この点からも、県廷に派遣された隸臣妾と、官に派遣された隸臣妾が混同して使役されることはなかったと推察される。

18) 「養」は、「走」や「守府」と同じく、隸臣に割り振られた役務名称で、炊事を担当した。「吏養」と「徒養」があるが、ここでは令史に割り振られているので「吏養」であろう。

卅一年四月癸未朔甲午，【倉是】□□

大隸臣廿六人□

其四人吏養。唯・冰・州・□□ (8-736)

表二 県廷文書の通伝担当

人名	通送記録		A①県廷 → 官	
孫	8-453+8-610	隸妾孫	8-1538	隸妾孫
申	8-1155	隸臣申	8-63	走申
快	9-1594	守府快	8-71	守府快
			8-140	
	16-1		8-155	
印	16-3	走印	8-1510	走印

時刻の表記について、県廷から官へ送られた文書の場合は日時計が七例、漏刻が四例確認できる。また、官から県廷へ送られた文書の場合、日時計が十八例、漏刻が十三例確認できる。これらはいずれも、県廷から発信された時刻、あるいは県廷で受信した時刻であるため、遷陵県廷に漏刻の設備が備わっていたことがわかる。そして、通送記録と比べて漏刻の事例が少ないことが指摘できる。

2 県内文書の通伝 2 —— 郷

次に、B 県廷から郷への通伝、および郷から県廷への通伝は、表三のように一覧できる（ は、文書書写者と通伝担当者が同一であることを示す）。

表三 県内文書の通伝 2

B 遷陵県廷 ⇄ 郷（二三例）

N _o	簡 号	発信	受信	時刻	通伝	行/以来	書写
1	8-157②	遷陵丞昌	啓陵	日時計	守府快	行	氣手
2	9-984②	遷陵坡	都郷畜夫	即	走印	行都郷	—
3	8-142	都郷守舍	(県廷)	日時計	佐初	【以来】	不明
4	8-170	都郷守敬	(県廷)	日時計	佐宣	行廷	不明
5	8-196+8-1521	都郷守不明	(県廷)	日時計	佐初	以来	不明
6	8-660	都郷守【蜀】	(県廷)	日時計	郷守蜀	以来	【蜀手】
7	8-1554	都郷守沈	(県廷)	日時計	(都郷守) 沈	以来	沈手
8	8-1443+8-1455	都郷守武	(県廷)	日時計	佐初	以来	初手
9	8-2011	都郷守是	(県廷)	日時計	佐初	以来	不明
10	8-157①	啓陵郷夫	(県廷)	日時計	隸妾冉	以来	壬手
11	8-651	啓陵郷守繞	(県廷)	日時計	隸妾咎	以来	不明
12	8-767	啓陵郷趙	(県廷)	漏刻	郵人敞	以来	貝手
13	8-769	啓陵郷守狐	(県廷)	日時計	郵人□	以来	狐手
14	8-1525①	啓陵郷守意	(県廷)	日時計	佐贛	以来	恬手
15	8-1562	啓陵郷趙	(県廷)	漏刻	□□	以来	貝手
16	9-2352①	啓陵郷趙	(県廷)	日時計	高里士五敞	以来	見手
17	16-9	啓陵郷□	(県廷)	日時計	不更成里午	以来	不明
18	8-645	貳春郷守根	(県廷)	日時計	史邛	以来	邛手
19	8-673+8-2002①	貳【春郷】	(県廷)	日時計	東成□上造□	以来	不明
20	8-1293	【貳】春郷茲	(県廷)	不明	卒寄	以来	不明
21	8-1515	貳春郷守綽	司空主	日時計	隸臣良朱	以来	邛手
22	9-14	貳春郷茲	(県廷)	日時計	戌卒寄	以来	詘手
23	12-849①	貳春郷窰	(県廷)	日時計	佐頽	以来	頽手

B 遷陵県廷と郷との文書通伝：

まず、県廷から郷への通伝は「走」と「守府」、つまり隸臣妾が通伝を行なっている。また、先述のとおり、通送記録にみえる通伝担当者と完全に一致する。

次に、郷から県廷への通伝は、都郷の場合は郷守と郷佐、啓陵郷の場合は郵人と郷佐、民、隸妾、貳春郷の場合は史と卒、民、隸臣が文書を通伝している。隸妾が貳春郷と啓陵郷へ派遣されたことは、前掲「倉徒簿」(10-1170)の「女卅四人付貳春」「女六十人付啓陵」よりうかがえる。なお、都郷への隸臣妾の派遣は、現有の里耶秦簡には確認できない。

郵人は啓陵郷から県廷へ送られた文書にのみ確認できる。啓陵郷に郵人が配置されたことは、以下の資料からうかがえる。

6 卅二年正月戊寅朔甲午，啓陵郷夫敢言之。成里典・啓陵郵人缺。除士五（伍）成里勾，・成，成爲典，勾爲郵人，謁令尉以從事。敢言之。（正）

正月戊寅朔丁酉，遷陵丞昌卻之啓陵。廿七戸已有一典，今有（又）除成爲典，何律令應（應）。尉已除成・勾爲啓陵郵人，其以律令。／氣手。／正月戊戌日中，守府快行。正月丁酉旦食時，隸妾冉以來。／欣發。 壬手。（8-157背）

郷から県廷に送られた文書の通伝は、一部、郵人や卒などがみえるが、主に郷佐と隸臣妾が請け負い、「走」や「守府」といった役務名称はみられない。この倉から郷に派遣された隸臣妾は「倉徒簿」に具体的な役務名称が明記されていないため、文書通伝を専門として行なうのではなく、郷での雑役全般に使役されたのであろう。

時刻の表記について、県廷で郷からの文書を受信する場合は主に日時計を用い、漏刻はわずかに二例のみである。そのため郷から県廷へ送られた文書については、時間の管理がそれほど厳密ではなかったと予想される。

二 県外文書にみえる文書通伝

ここでは洞庭郡や他県との県外文書について検討しよう。C 遷陵県と洞庭郡との通伝は十九例、D 遷陵県と他県との通伝は六例確認でき、表四のように一覧できる（ は、文書書写者と通伝担当者が同一であることを示す）。

遷陵県と洞庭郡との通伝には、郵人や官吏などが確認でき、通送記録や県内文書にみられた隸臣妾による通伝の事例がみられない点が特徴である。

まず、郵人による通伝は八例あり、県内文書のそれよりも多い。このうち（5）（10）（16）に「都郵人」とある¹⁹⁾。このほか「都郵人」には、「都郵士五（伍）繡以來」（8-66背+8-208背）があり、一般の

19) 前掲『里耶校釈（一）』では「都郷の郵人」と解釈する。「都，都郷之省。8-1519 “都郷”即省寫作“都”。都郵，也見于8-1432。都郵人，即都郷之郵人」（四八頁）。

表四 県外文書の通伝一覧

C 遷陵県と洞庭郡との通伝（一九例）

N _o	簡 号	発信	受信	時刻	通伝	行/以來	書写
1	8-61+8-293+8-2012	洞庭守禮	県畜夫	☐	佐惜	以來	☐
2	8-657②	洞庭守禮	県畜夫	漏刻	士五疵	以來	不明
3	8-740+8-2159	洞庭守禮	県畜夫	漏刻	郵人慶	以來	☐
4	8-1523(8-755~759)	洞庭段守繹	遷陵	漏刻	郵人曼	以來	(歇手)
5	9-712	洞庭段守齋	(遷陵)	漏刻	都郵人☐	以來	不明
6	12-1784②	洞庭段(假)守☐	県	日時計	郵人纏	以來	配手
7	16-5①	洞庭守禮	県畜夫	漏刻	求盜簪裏辰	以來	如手
8	16-5②	洞庭守禮	県畜夫	漏刻	陽陵士五勾	以來	如手
9	16-6①	洞庭守禮	県畜夫	漏刻	士五巫下里聞令	以來	如手
10	8-62	遷陵丞昌	洞庭郡	漏刻	都郵人☐	行	尚手
11	8-154	遷陵守丞都	洞庭郡	漏刻	郵人得	行	園手
12	8-175	【遷陵県】	洞庭郡	☐	佐午	行	午手
13	8-197①	遷陵守丞配	洞庭郡	日時計	居賞枳壽陵左	行	☐
14	8-197②	遷陵守丞配	洞庭郡	日時計	令佐信	行	☐
15	8-664+8-1053+8-2167	遷陵守丞都	洞庭郡	日時計	郵人辰	行	☐
16	8-704+8-706	遷陵守丞齋	不明	日時計	都郵人羽	行	☐
17	8-1511	遷陵丞昌	洞庭郡	漏刻	(令史)感	行	感手
18	8-1516	遷陵守祿	洞庭郡	漏刻	乘城卒士五順	行旁	壬手
19	16-6③	遷陵丞歐	洞庭郡	日時計	令史犯	行	鉤手

D 遷陵県と他県との通伝（六例）

N _o	簡 号	発信	受信	時刻	通伝	行/以來	書写
1	8-75+8-166+8-485③	遷陵守丞臚之	郢丞主	漏刻	佐氣	行旁	敵手
2	8-158	遷陵守丞色	西陽丞主	日時計	守府快	行旁	欣手
3	8-63①	旬陽丞滂	遷陵丞主	日時計	秦士五狀	以來	兵手
4	8-133	西陽具獄獄史啓	(遷陵)	漏刻	走賢	以來	☐
5	8-647	西陽守丞又	遷陵丞主	漏刻	隸妾少	以來	彼死手
6	9-984①	西陽守丞又	遷陵丞主	漏刻	隸妾某	以來	樛手

民が郵人に任命される点は、前掲簡 6 と共通する。また、前掲簡 6 のように啓陵郷に郵人が存在したのであれば、「都郵人」は、都郷所属の郵人であろうか。そうすると、旧稿で存疑とした通送記録の作成場所の第一候補は「都郵」になろう。

次に、官吏による通伝は、いずれも洞庭郡への上計あるいは簿などの提出にかかわる。表四 C (17) を例として説明しよう。

7 廿九年九月壬辰朔辛亥，遷陵丞昌敢言之。令々史感上水火敗亡者課一牒。有不定者，謁令感定。敢言之。已。(正)

九月辛亥水下九刻，感行。 感手。(8-1511)

簡7は、始皇二九年（前218）に遷陵県から洞庭郡に送られた上行文書で、遷陵県令史の感という人物に、「水火敗亡者課」一牒を提出させる旨が記されている。そして、この文書の発信記録には、令史の感本人が文書を持って行ったと記録される。

(17)のほかに、官吏が通伝した文書には、(12)「【泰】守府今上當令者一牒」、(14)(19)「寫上」のように、いずれも郡への上計や簿などの提出にかかわる文書用語や句型がみてとれる。したがって、遷陵県から洞庭郡へ送られる文書のうち、郡への報告と関係するものは、必ず官吏が通伝を担当したと考えられる。なお、このような郡への報告は、倉徒簿（10-1170）に「男十六人與吏上計」、「女廿三人與吏上計」や「司空徒簿」（9-2294+9-2305+8-145）に「四人與吏上事守府」、「八人與吏上計」とあるように²⁰⁾、隸臣妾や城旦舂により補助された。

そのほかの時刻の表記について、洞庭郡から遷陵県に送られた下行文書の場合はいずれも漏刻で時刻が計測される。郷から遷陵県に送られた上行文書の受信記録が、ほとんど日時計で計測されていたことをふまえると、文書の作成官府に依じて、計測方法を使い分けた可能性がある。

D 遷陵県と他県との通伝：

遷陵県と他県との通伝には、佐や隸臣妾、民が確認できる。他の区分に比べて用例が少なく傾向を見出し難い。ここでは、通伝担当者末尾に附された(1)(2)「行旁」について、現在確認できる用例をもとに私見を述べたい。

馬怡氏は、「行旁」の「旁」は「旁県」つまり隣県の西陽県を示すと考え²¹⁾。しかし、(1)は鄴県へ送られる文書であり、洞庭郡へ送られる文書（8-1516）にも「行旁」と記されているため、「旁」が西陽県を示すとは考え難い。

現有の里耶秦簡には類似の用例として、「行廷」（8-164+8-1475, 8-170, 8-686+8-973）をはじめ「行司空」（8-63, 8-135）、「行尉曹」（8-71）、「行少内」（8-155）、「行尉」（16-6）、「行都郷」（9-984）が確認できる。以上の事例は県内文書ではあるが、「旁」が宛先を示すことは間違いない²²⁾。

しかし、現在三例ある「行旁」の共通項は、県外へ送る文書という点のみである。ところが、洞庭郡へ文書を送る場合、通常は「行」とのみ記されている。現時点では、遷陵県から他県へ送る文書の用例が少ないため、この問題については、新たな資料が公開されたのちに改めて考えてみたい。

20) これは遷陵県の司空が管理する城旦舂や鬼薪白粲、居貨贖債に割り振られた労役内容を一覽した一日分の帳簿である。石原遼平「里耶秦簡にみえる刑徒労役」（二〇一四年三月八日、中国出土資料学会二〇一三年度第三回例会、報告論文）では、もともと断簡であった9-2294+9-2305+8-145を復原し、作徒簿から遷陵県の刑徒労役の実情を示した。この復原は、のちに前掲『里耶博秦簡』（五〇・五一頁）に掲載されている。

21) 馬怡「里耶秦簡選校」（『中国社会科学院歴史研究所學刊』第四集、商務印書館、二〇〇七年）。当時は、三五点のサンプル資料しかなく、「行旁」の用例は西陽県のみであった。

22) 「行旁」の用例がいずれも遷陵県内の部局を示していることから、「旁」が遷陵県内の特定の場所を示す可能性もある。その場合、「旁」は都郵ではなかろうか。

4 里耶秦簡にみえる行書日数

これまで、県廷と官、県廷と郷、県廷と県外、という三つの区分における通伝担当者について検討し、遷陵県における文書通伝の作業動線とそれを担当した人員について考察してきた。ここでは、里耶秦簡の文書簡にみえる発信と受信の日付から行書日数を算出し、遷陵県における行書空間を通伝速度の面から検討したい。このうち県廷と官の区分および都郷については、特別な場合を除くと当日のうちに文書が届けられている。そこで、1 遷陵県廷——啓陵郷・貳春郷、2 遷陵県——洞庭郡、3 遷陵県——他県、の三区分について、表五をもとに整理しよう。

表五 里耶秦簡にみえる行書日数一覧

区分	簡番号	発	着	担当	日数
1 郷					
啓陵郷	8-157①	卅二年正月戊寅朔甲午	正月丁酉	隸妾冉	3
	8-651	卅三年正月壬申朔朔日	正月庚辰	隸妾咎	8
	8-767	廿八年七月戊戌朔辛酉	七月丙寅	郵人敞	5
	8-769	卅五年八月丁巳朔己未	八月□□	郵人□	—
	8-1525〔1533〕	卅四年七月甲子朔癸酉	七月乙亥	佐贛	2
	8-1562	廿八年七月戊戌朔乙卯	七月己未	□□	4
	9-2352	【廿】八年三月庚申（庚子朔）	三月乙丑	高里士五敞	5
	16-9	廿八年五月辛巳朔庚子	【五月】甲辰	不更成里午	4
貳春郷	8-645	廿九年九月壬辰朔辛亥	九月辛亥	史邛	0
	8-673+8-2002	卅五年七月【戊子】朔壬辰	七月乙未	東成□上造□	3
	8-1293	×	×	卒寄	—
	8-1515	卅年十月辛卯朔乙未	十月辛丑	隸臣良朱	6
	9-14	卅五年三月庚寅朔丙辰	四月壬戌	戌卒寄	6
	12-849①	廿七年六月乙亥朔壬午	六月丁亥	佐頹	5
2 洞庭郡					
	8-61+8-293+8-2012	六月丙午	□	佐惜	—
	8-657②	六月乙未	【月庚】午	士五疵	11
	8-740+8-2159	□	□	郵人慶	—
	8-1523②（8-755～759）	八月癸巳朔癸卯	九月乙丑	郵人曼	23
	9-712+9-758	【卅一年】六月壬午朔戊戌	七月己未	都郵人□	22
	12-1784②	（卅三年）二月壬寅朔甲子	三月丙戌	郵人纏	23
	16-5①1	廿七年二月丙子朔庚寅	二月癸卯	求盜簪裏辰	13
	16-5①2	〃	三月癸丑	士五勾	23
	16-6①	〃	【三】月戊申	士五聞令	18
3 他県					
西陽県	8-63①	（廿六年三月壬午朔）三月辛亥	十月辛卯	秦士五狀	—
	9-984	廿八年八月戊辰朔丁丑	八月壬辰	隸妾	15
	9-1867	【卅一年】九月庚戌朔壬申	後九月丙戌	隸妾要	14

まず、1 啓陵郷は二日から八日、貳春郷は三日から六日で、文書が遷陵県廷に到着する。

次に、2 洞庭郡について、洞庭郡府から文書を発信して遷陵県に到着するまでの行書日数は、最短で十一日、最長で二十三日のように、かなりひらきがある。事例が少ないためはっきりしないが、郡からの文書通伝には二つの速度が存在していた可能性がある。

そして、3 他県、特に西陽県については、十五日程度で文書が届けられている。しかし、西陽県から遷陵県までの文書通伝には、後掲簡8のように、「以郵行」の路線が確認できる。簡8は、西陽県廷から出発して、啓陵郷を通過し、遷陵県に届けられる文書についての通送記録だと考えられる。この記録に

みえる酉陽県廷から啓陵郷までの行書日数は、わずか三日であり、表五にみえる酉陽県から遷陵県までの行書日数十五日と大きなひらきがある。

そうすると、先述した洞庭郡からの行書日数にも二つの速度を想起させる事例がみえたが、酉陽県から文書通伝にも二つの速度が存在していたと考えられないであろうか。とりわけ、酉陽県——啓陵郷——遷陵県という路線においては、前掲簡6からも啓陵郷に郵が設置されていたと思われ、表三(12)(13)では、啓陵郷からの文書を郵人が通伝している。

そこで、後掲簡8の酉陽県廷から啓陵郷までの行書日数と、遷陵県廷から啓陵郷までの最短の行書日数を合わせてみると、わずか五日で酉陽県から遷陵県まで文書が届くことになる。この五日という日数は、洞庭郡から遷陵県までの最短日数である十一日に対応するのではなかろうか。現有の里耶秦簡には県外の行書日数を算出できる資料が極めて少なく、あくまで想像の域を出ないが、この速度こそが里耶秦簡の文書簡や封検に散見する「以郵行」方式の可能性²³⁾がある。この点については、資料の追加を待つて再考したい。

三 中継の通送記録

前節までは、遷陵県における文書通伝の詳細について考察してきた。では、通送記録に記されるような洞庭郡や他県に送られた、あるいは外から遷陵県に送られた文書は、どのようにして通伝されたのであろうか。この問題について、里耶秦簡に数例みえる「中継の通送記録」を手掛かりに考えたい。

1 中継の郵書記録

里耶秦簡の中継の通送記録には、遷陵県城外で中継された文書の通送状況が記されている。以下に例を挙げる。

8 書一封酉陽丞印詣遷陵以郵行

廿八年二月癸酉水十一刻＝下五起酉陽廷

二月丙子水下九刻過啟陵郷(12-1799)



文書が一封。酉陽県丞の印で封印され、宛先は遷陵県。通送方式は「郵」。

23) 里耶秦簡には「以郵行」のほかに「以県次伝」という通送方式が散見する。出土秦漢律により両者の制度上の違いは理解できるが、これまでの里耶秦簡研究では実際の速度が異なるかどうかは確認されていない。文書の通送方式については、鷹取祐司「漢代の文書伝送方式」(『秦漢官文書の基礎的研究』, 汲古書院, 二〇一五年)に詳しい。

始皇二十八年二月癸酉，水十一刻，刻下五，酉陽県廷より発信した。

二月丙子，水下九刻，啓陵郷を通過した。

簡8は、長さ46.0cm、幅3.3cmであり、その形状は一見して発信の通送記録（およそ23.0cm）と異なる²⁴⁾。一行目には、1 文書の数、2 発信印、3 宛先、そして「以郵行」という通送方式が記される。二行目には、4 文書が発信された年月日と時刻、5 発信元（起某）が記される。三行目には、6 文書が通過した月日と時刻とその7 通過場所（過某）が記される。各項目に記される情報は通常の通送記録と同じである。各項目を整理すると以下のようになる。

中継の通送記録の書式

1 文書の数	2 某印	3 詣遷陵	以郵行
4 文書発信の年月日、時刻	5 起某（発信元）		
6 文書通過の月日、時刻	7 過某（通過場所）		

簡8は、酉陽県から郵を利用して発信された文書（「以郵行」）が、啓陵郷を経由して遷陵県に送られるまでの経過を記録している。最後に記録された地点は啓陵郷であり、遷陵県に届いた時点の記録はない。

この通送記録からは、まず、啓陵郷が遷陵県と酉陽県の間、つまり遷陵県の東側に位置することがわかる。また、酉陽県を二月癸酉（三日）に出発し、二月丙子（六日）に啓陵郷を通過しているため、郵を利用して文書を通伝した場合、酉陽県から啓陵郷までの行書日数はおよそ三日であることがわかる。さらに、この記録が遷陵県から出土したということは、文書と一緒に遷陵県まで運ばれたのちに廃棄されたということになろう。

この記録の作成から廃棄までの経緯については、筆跡が手掛かりになる。この記録は、第一行目、第二行目、第三行目と、それぞれ筆跡が異なる。そうすると、第一行目は酉陽県で文書を作成した際に記し、第二行目は酉陽県から文書が発信された際に記されたことになる。発信の起点は「酉陽都郵」であろう²⁵⁾。そして、第三行目は啓陵郷を通過した際に記された。先述のように、啓陵郷には郵が設置されていた。

このように、里耶秦簡の中継の通送記録は、発信地や中継地点で通過日時を書き足して、受信地まで通送文書と一緒に運ばれたと考えられ、西北漢簡の郵書とも性格を異にする。

2 送徼と徼書

では、中継の通送記録は、どのように作成されたのであろうか。このような通送記録は、西北漢簡にみえる郵書とも性質を異にする。そこで時代は異なるが、漢初の張家山漢簡にみえる「送徼」と「徼書」

24) サイズ詳細は、前掲『里耶博秦簡』「附録二 館藏簡牘出土登記号与形制表」（一五九頁）を参照した。

25) 「酉陽都郵」は9-739にみえる。

という用語をてがかりに、私見を述べたい。

まず「送徼」は、張家山漢簡『二年律令』行書律に「更封而署其送徼」（二七四・二七五簡）とある。そして「徼書」は、張家山漢簡の『奏讞書』という裁判案例中に「詐更其徼書」（案例十二，六〇簡）とみえる。両者は上記の一例のみ確認でき、典籍史料にはみられない。

この「送徼」と「徼書」に共通する「徼」字について、図版でははっきりと「徼」と記されているが、先行研究の多くは「檄」の意に読み替えている²⁶⁾。「徼」は、『説文解字』に「徼，循也」とあり、『漢書』顔師古注に「徼謂巡察也」とあるように²⁷⁾、「めぐる」という意味をもつ。一方「檄」は、『説文解字』に「檄，尺二書」とあり、『漢書』高帝紀顔師古注に「檄者，以木簡爲書，長尺二寸」とあるように、長さ一尺二寸の書と解釈される²⁸⁾。どちらの字がふさわしいかは、具体的な事例を検討して考えたい。

第一に、「送徼」について、『二年律令』「行書律」の条文には、封泥が毀れた場合、「送徼」に「更めて県令もしくは県丞の官印で封印した」と記すように規定されている。この「送徼」は、公文書の機密性を保証するため、当然、その逋伝文書と一緒に宛先まで送り届けられなければならないはずである。したがって、「送徼」は、発信地や中継地に残された逋送記録とは別の機能を有したものであるということになる。

では、この「送徼」には、どのような情報が記されたのであろうか。彭浩氏は、「各郵駅は文書の発受信の日時を送徼に記」したと考え²⁹⁾、李均明氏は送徼を「伝行記録」とみなす³⁰⁾。両氏の説に従えば、「送徼」は郵書に類似した逋送記録ということになるが、現時点では、それを裏付ける資料はない。この点について「徼書」とあわせて考えてみよう。

第二に、「徼書」については、張家山漢簡『奏讞書』に以下のようにある。

郵人官大夫内留書八日，詐更其徼書辟留。疑罪。●廷報，内當以爲偽書論。

（案例十二，六〇簡）

本案例には、郵人の内が、文書を留め置いた罪を隠蔽するために「徼書」を書き更めたため、廷尉から「偽書」罪で論告されたとある。本案例の焦点である「詐更其徼書」という行為は、二通りの場面が想定できる。ひとつは、郵人が逋伝する文書本体に記された日時を改竄した³¹⁾。この場合、「徼書」では

26) 彭浩・陳偉・王藤元男主編『二年律令与奏讞書』（上海古籍出版社，二〇〇七年）二〇三頁，および彭浩「読張家山漢簡《行書律》」（『文物』二〇〇二年第九期）五六頁。

27) 『漢書』卷五三，景十三王伝。

28) 京都大学人文科学研究所簡牘研究班編『漢簡語彙』（岩波書店，二〇一五年）には、「①文書を書くための断面が多角形の棒。②密封せず衆目にさらすことで、注意を喚起するのを目的とした文書。軍事，召喚，譴責などを内容とする。」とある（一二三頁）。

29) 前掲彭浩「読張家山漢簡《行書律》」三五頁。

30) 李均明「張家山漢簡〈行書律〉考」（『中国古代法律文献研究』第二輯，法政大学出版社，二〇〇四年）。なお、李均明氏は、「送徼」が西北漢簡に散見する郵書に相当すると考える。

31) 池田雄一編『奏讞書——中国古代の裁判記録』（刀水書房，二〇〇二年）では、「転送を怠った緊急文書を改竄」（八八頁）したと解釈する。

なく「檄書」と釈読すべきであろうか。もうひとつは、通伝文書とは別に「檄書」が存在し、そこに記された日時を改竄した³²⁾。

本案例は冒頭に「留書八日」とあり、後文に「檄書」とあるように、通伝文書の「書」と「檄書」とがはっきりと区別されている。また、もしも文書本体を改竄するのであれば必ずしなければならない、「毀封（封を毀す）」という行為が簡文に明記されていない点も不自然である。なぜならば、『二年律令』賊律に「毀封，以它完封印印之，耐爲隸臣妾。」（一六簡）と規定されているため、もしも郵人の内が文書の封印を毀して、中の本文を改竄したのであれば、その罪状が明記されるはずである³³⁾。したがって、通伝文書とは別に「檄書」というものが存在し、郵人の内は、そこに記された日時を改竄したと考えたほうが妥当であろう。そうすると、先述した「檄」は文書本体を示すので、「檄」に読み替えるのではなく、そのまま「檄書」と解しておくべきであろう。

では、「送檄」、「檄書」は、互いにどのような機能を有し、どのような内容が記されていたのであろうか。上述の事例からは、通送記録本体と「送檄」は別のもので、なおかつ「檄書」は文書本体を示す「檄」ではないと推測した。また、『奏讞書』の事例により、「檄書」には文書の発受信の日時が記されていたこともわかる。

上述のような特徴を備えた資料として、前掲簡8の中継の通送記録が想起される。里耶秦簡にみえる別の中継の通送記録を一例追加しよう。

- 9 ☒ ☐ ☐ 以郵行 ☐ 月丙子食時過 ☐ ☐
☐ ☐ 臨沅 ☐ ☐ ☐ 夕過 ☐ ☐ 郵（正）
☒ 十一月丙申旦過都郵
☒ 十一月癸卯旦過西陽【都】郵（8-1432背）



簡9は断簡で判読できない文字が多いが、一行目に「以郵行」という通伝方法が記され、「過某」といった複数の経由地が記されている³⁴⁾。正面二行目の「臨沅」、背面二行目の「西陽【都】郵」により、臨沅方面から遷陵県に送られてきた文書の通送記録であると推測できる。また、簡8と同様に、各行がそ

32) 彭浩「談《奏讞書》中的西漢案例」，三五頁（『文物』一九九八年第三期。のち日文が前掲池田雄一『奏讞書——中国古代の裁判記録』に再録）。

33) 懸泉漢簡には、実際に郵人が封を毀したことにより、取り調べを受けている。「捕郵人宣里田大公子男萬歲，驗問，辭曰。數坐破封，効☒」（懸泉漢簡Ⅱ T0216②：621）

34) 類似の通送記録に「☒五月庚寅旦過西陽都郵」（9-739）がある。

れぞれ異なる筆跡で記されていることから、発信地から受信地まで、書き継がれてきたと考えられる。筆者は、このような通送記録が「送徹」「徹書」にあたるのではないかと考える。さらに両者について考えてみよう。

まず、「送徹」には、「封泥が毀れた場合に某印で封印した」と附記する機能があった。仮に、簡8・9のような通送記録に附記したとすると、宛先に届くまで文書の機密性を損なわずに、情報を追加することができる。なおかつ、複数の経由地で書き継がれていくため、どの地点で「封毀」したのかが明確になるという利点もある。

次に、「徹書」は、通伝文書そのものではなく、日時などの通伝情報が記された通送記録と考えた。また、複数の経由地での受信記録が記されていたとも考えられる。仮に、簡8・9のような通送記録が「徹書」であったとすると、『奏讞書』の事例で「詐更其徹書」をした場合でも、封泥を毀す必要はなく、案例に記された状況に合致すると考えられる。

以上、推論を重ねたが、「送徹」と「徹書」は、現時点では簡8・9に類似の通送記録であると推測される。このように、秦代の文書通伝機構では、「送徹」や「徹書」のような中継の通送記録に通伝情報を書き継ぎ、なおかつ発受信地点では、発信の通送記録の作成および文書の発受信情報が明記された。したがって、複数の地点、複数の人員による多重の管理体制によって、秦代の文書通伝システムの精確性が維持されたと考えられる。

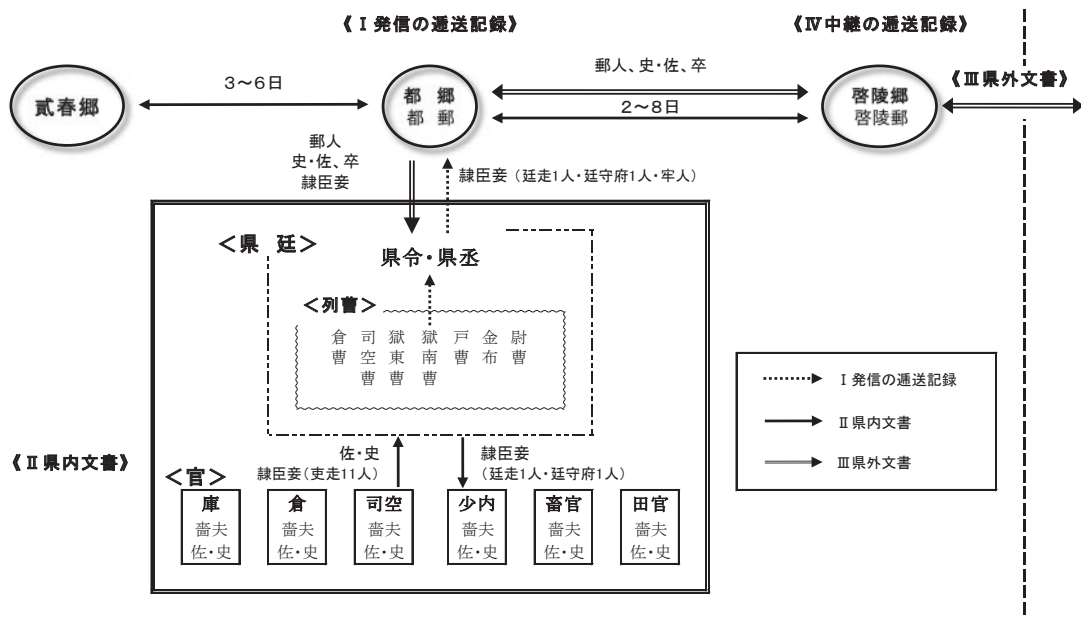
おわりに

本稿では、里耶秦簡の通送記録と文書簡にみえる発受信の記録をもとに、秦代遷陵県における文書通伝について、文書の通伝担当者とその作業動線を中心に考察してきた。本考察の結果をまとめると以下のようなになる。

- (1) 遷陵県の県内文書には、県廷と官、県廷と郷との文書がある。まず、県廷から官および郷への文書は、いずれも県廷に派遣された隸臣妾（「廷走」「廷守府」など）によって通伝された。この県廷に派遣された隸臣妾の多くは、通送記録にみえる通伝担当者と一致する。一方、官から県廷への文書は、文書の書写者と当該文書に記された内容・用務に関連がある場合、文書を書写した官吏（佐・史など）によって通伝され、それ以外は、官の令史に従属する隸臣妾（「吏走」）によって通伝された。県廷および官の隸臣妾の間には明確な区分けがあり、作徒薄に登録された場所のみで使役されたと考えた。
- (2) 遷陵県の県外文書、とりわけ洞庭郡との文書の多くは、郵人によって通伝された。現時点で遷陵県には、都郷と啓陵郷の二箇所にも郵の設置が確認できる。また、洞庭郡への上計や簿籍などの提出にかかわる場合は、官吏によって通伝された。
- (3) 里耶秦簡にみえる行書日数を算出すると、洞庭郡ならびに西陽県からの文書には、二種類の通送速度が存在し、速いほうを「以郵行」方式と推察した。
- (4) 中継の通送記録には、西陽県から啓陵郷を経由して遷陵県に送られるまでの経過が記された。この中継の通送記録は、複数の筆跡が確認できるため、通送文書と一緒に受信地まで運ばれたと推

察される。したがって、秦代文書行政においては、文書の発信地で発信の通送記録を作成し、かつ発受信地で文書の発受信情報を明記するだけに留まらず、中継地点で通送記録を書き継ぐようにして、複数の地点、複数の人員による多重の管理体制によって、文書通伝システムの精確性が維持されたと考えた。

以上の考察結果をもとに、秦代遷陵県における行書空間は図三のように示すことができる。



図二 遷陵県における行書空間

本稿では、里耶秦簡の文書通伝に関する資料を集成し、典籍史料からうかがうことのできなかった、秦代県レベルでの文書通伝の実態について考察した。本考察により、複数部署における多重管理体制の構築など、現有の秦律にはみられない、高度な文書通伝システムの存在が明らかになった。

このような文書通伝システムが、統一直後、かつ南方のフロンティア地域において、正確に実行されていたということは、内郡ではこれよりも整備された状況であったことが容易に想像できる。そうすると、秦漢時代の文書行政の萌芽は、従来の想定よりも少し遡り、戦国時代中期あたりに設定しなければならないであろう。

